

しんま 辰砂 (名) 「支那辰州の産、上品なるよりいふ」

しんま 参差 (名) しんし(参差)を見よ。

しんま 新座 (名) しんざん(新座)に同じ。

しんま 人差 (名) 英 Individual difference (名) 「各個人の精神作用の諸方面に於て、他人と異なる特種の點の稱。始め心理學者は、かかる個人間の心的相違を、被實驗者の實驗の際に於ける特種の心的態度、並びに實驗者の實驗の上に於ける粗漏より起されるものと考へ、其の除去を務めしが、研究の進むにつれ、斯かる心的相違は研究の對象として重要な心的事實なる事を知るに至れり。

しんま 眞宰 (名) 宇宙の主宰者。造化の神。天帝。造物主。太平記「文藝眞宰の臂を擧げて壺中に天地を造り造化の工を奪うて橋裏に山川を峙つ」老子「有眞宰足以前萬物」莊子「使若者有眞宰」

幸、而特不得其陰」

しんま 震災 (名) 地震の災害。震災豫防調査會官制「震災豫防に關する事項」

しんま 新妻 (名) 新に妻りたる妻。にひづま。新婦。

しんま 親祭 (名) 神道の式を以て行ふ祭事。

しんま 人材 (名) 才智の勝れたる人物。役に立つ人物。

しんま 神在煮 (名) ぜんざい(善哉餅)に同じ。小豆に餅を入れ、醬油にて煮、砂糖をかけて食す。土佐國の方言。

しんま 神在餅 (名) ぜんざい(善哉餅)をいふ。出雲國の方言。祇園物語「出雲國に神在もちと申す事あり」

しんま 眞相 (名) 實際の有様。眞實の事相。洛陽伽藍記「菩提達磨曰得眞相也」李紳詩「眞相有無因色界」

しんま 心操 (名) 心のみさま。心ば。志操。盛衰記「心操落落居して、柔和を性に備へたり」太平記「心操、眞相宗の模倣とする處は、宋朝の行儀、眞ぶ處は祖師の行迹なり。然るに今の神僧之心操、法則、皆是れに相違せり」

しんま 眞草 (名) 眞草と草書と。著聞「眞草兩様」書きて奉るべき由、勅定有りければ「庚曆書文書局工部兼教、眞草皆成」陸龜蒙詩「眞草眞草」眞草の草書。顏氏家訓「梁氏經閣、散逸以來、吾見二王眞草、多矣」

しんま 眞草 (名) ふしぎなる草。獨孤及文選「眞草」眞草にんじん(人参)の異名。

しんま 神葬 (名) 神道の式による葬式。佛葬などの對。

しんま 新装 (名) あたらしき服装。あたらしき服。

しんま 新粧 (名) あたらによそはぶこと。改めて化粧すること。陳後主詩「新粧臨寶帳」

しんま 心喪 (名) 喪期終りたる後、猶下し、又は苗木を植ゑ附けて仕立てたる森林。

喪中の如く心に哀しみを抱くこと。禮記「服動至死、心喪三年」

しんま 神像 (名) 神の肖像。神のかたち。

しんま 心像 (名) 「心」過去に於て意識に映じたる外物の現象が、再び意識に表現するもの。

しんま 心臓 (名) 「腎」胸腔内、左右兩肺の間にあるほぼ倒圓錐形、筋肉質、中空の器官。内腔は中隔により全く二分せられ、各半もまた横隔壁により上下に二分せらる。上部を心耳、下部を心室といふ。心臓は血液循環の原動力を與ふ。王逢詩「才名從知造物惡、心臓空夢神人部」

しんま 神造 (名) 神の造りたること。又、靈妙なる造作。陸雲文「即謀神造、啓運妙玄」

しんま 新造 (名) 新に建造すること。新に作成すること。平治「新造の内裏」著聞「修理を加へけるに、大略みな新造になしたりければ」書經「厥亂明我新造邦」史記「趙欲以新造未集之越、屈張于此」新婦人、又は、人の妻を呼ぶ稱。婚禮の前に其の妻の居所を新しく造るよりいふ。日次紀事「俗謂新造曰新造、言新造宅使居之義也」

しんま 刃削 (名) はものにて切りたるきず。かたなきず。金削。刀傷。

しんま 人造 (名) 人間の製造。又、人間の製造物。人工。人作。(天造の對)

しんま 人造藍 (名) 「化」こゝろのたゝるより得るなふたれんを原料とし、之に數種の化學變化を受けしめて成生する青色染料。其の組成、性質などは全く植物の藍より製取するものと同一なり。植物の藍を天然藍といふに對し、化學的方法によりて製成せらるるを以て人造藍といふ。

しんま 腎臓炎 (名) 「腎」腎臓の病。顔面、手足、陰囊等に水腫を生じ、顔色蒼白となりて便通惡しく、下腹及び腰部に疼痛を感ず。次第に重りては惡寒、戰慄、發熱、嘔吐等を起こすに至る。尿毒性的ものは最も危險なり。

しんま 深造岩 (名) 「地」火成岩の一種。岩漿が地中の深所に凝結して生じたもの。花崗岩の類。

しんま 心臓形 (名) 「植」植物學上の用語。縱截せる心臓の如き形。底部の中央凹入せり。えふきやく(葉脚)、及びえふけい(葉形)を見よ。

しんま 腎臓形 (名) 「植」植物學上の用語。縱截せる腎臓の如き形。心臓形より、形圓くして幅廣し。えふけい(葉形)を見よ。

しんま 人造絹絲 (名) 「化」植物纖維を原料として製し、光澤、弾性共に天然絹の如きもの。製法種種あり。其の一方は、ころぞおんを、細孔に通じて、少許の硫酸を加へたる水中に壓出して製す。

しんま 人造磁石 (名) 「理」人工を以て鐵に磁性を與へたるもの。即ち、磁石となさんとする銅に銅線を巻きて電流を通ずるか、或ひは強き磁石

の極に近づけ置きて磁性を與ふ。(天然磁石の對)

しんま 人造樟腦 (名) 「化」てれびん油に乾きたる鹽化水素を通ずれば、鹽酸びねん(C<sub>6</sub>H<sub>5</sub>Br)の結晶を成生す。其の香氣及び外觀共に樟腦に類するにより此の名あり。

しんま 人造麝香 (名) 人工にて、麝香に擬して製したる黃白色の結晶物。化粧及び服裝の香料に使用す。

しんま 人造石 (名) せめん(人造) (名) 「化」石灰石と粘土との適量の混合物を窯に入れて均熱して得たるものを更に粉砕して種種の用に供する硬化の成生物。ほーとらんと産の石に類するにより、通常ほーとらんとせめんといふ。

しんま 心臓病 (名) 「醫」心臓の作用の常態を失ひて、動悸烈しく、脈搏不齊となる病。

しんま 人造氷 (名) 「理」人為によりて起こされたる低温度によりて水を氷結せしめたるもの。工業上にては多くあむも、あを液化せしめ、之を蒸發して生ずる寒冷によりて氷を造る。(天然氷の對)

しんま 心臓麻痺 (名) 「醫」心臓の麻痺して、收縮力を失ひ、其の作用の全く停止すること。

しんま 人造林 (名) 種子を

しんま 眞草 (名) 眞草と草書と。著聞「眞草兩様」書きて奉るべき由、勅定有りければ「庚曆書文書局工部兼教、眞草皆成」陸龜蒙詩「眞草眞草」眞草の草書。顏氏家訓「梁氏經閣、散逸以來、吾見二王眞草、多矣」

しんま 深草 (名) 深く生ひ茂れる草。朗詠「切切暗窓下、嚙嚙深草裡、秋天思婦心、雨夜兩人耳」

しんま 眞草 (名) 眞草と草書と。著聞「眞草兩様」書きて奉るべき由、勅定有りければ「庚曆書文書局工部兼教、眞草皆成」陸龜蒙詩「眞草眞草」眞草の草書。顏氏家訓「梁氏經閣、散逸以來、吾見二王眞草、多矣」

しんま 神草 (名) ふしぎなる草。獨孤及文選「眞草」眞草にんじん(人参)の異名。

しんま 新装 (名) あたらしき服装。あたらしき服。

しんま 新粧 (名) あたらによそはぶこと。改めて化粧すること。陳後主詩「新粧臨寶帳」

しんま 心喪 (名) 喪期終りたる後、猶下し、又は苗木を植ゑ附けて仕立てたる森林。

しんま 神策 (名) 不思議なる策略。靈妙なるはかりごと。妙策。神算。目下策に用ふるめとぎの稱。史記「寶鼎神策」

しんま 新策 (名) 新規なる策略。新規なる工夫。新案。

しんま 新作 (名) 新しく製作すること。新規の製作。春秋「魯新作南門」張衡詩「久別多新作」

しんま 振作 (名) ふるひおこすこと。盛んにすること。又、ふるひおこること。盛んになること。振興。振起。張說文「六樂振作、萬舞再興」

しんま 侵削 (名) おかしてけつりすること。禮記「公食小臣時起、土地侵削」史記「公食小臣時起、土地侵削」

しんま 入作 (名) じんざう(人造)に同じ。



しんじ 秋 秋 神州 (名) しんじく 神州に同じ。文部省が自國をさしていふ尊稱。史記五十四年、赤縣神州、赤縣神州内自有九州、禹之序九州是也。河間括地象、崑崙東南地方五千里、名曰神州、其中有五山、帝王居之。

しんじ 新愁 (名) あらたに催すうれ。陸游詩、新愁宿醉兩參差。

しんじ 深愁 (名) ふかきうれ。深憂。杜甫詩、春來花鳥莫深愁。

しんじ 神秀 靈妙にしてすぐれたる。靈秀。孫韓文、天台山者、蓋山嶽之神秀也。

しんじ 仁獸 (名) なきけある獸。百曰、我仁獸にして、生けるを食はず。公羊傳、麟者仁獸也。王者則至しんじうたじ 神州男子 (名) 我が國に生まれたる男子。

しんじりう 信州流 (名) をがさはらりう (小笠原流) に同じ。集義和書二問、甲州流、越後流、信州流といへるは如何。同志茶話、信州流といへるは、小笠原流の事なるが、小笠原軍もつばら雲氣、烟氣等の怪異を記し、浮屠、妄浮を正とし、多くは附會、信用に不足、近世甲家の兵書を取り交せて、師家を立つるやからあり。

しんじ 新式 (名) あたらしきかた。新しき法式。北史明使、禮儀、權衡、度量、領于天下。其不依新式者、悉遣停之。

しんじ 身色 (名) からだの色。狭衣。身色如金山、端嚴甚妙。諸色点染色とは風病の身色。法華經、身色如金山、端嚴甚妙。

しんじ 身識 (名) 佛語。身根に

よりて外物を知覚する能覺。しんじ 深識 奥深き見識。奥深き知識。國史補、李華含元殿賦初成、蕭穎士見之曰、景光之下、華著論言、龜卜可廢、可謂深識之士矣。王命論、超然遠覽、淵然深識。

しんじ 審識 詳細にすることを。孫楚文、審識安危、自求多福。

しんじ 公益行政 (名) 人の法律上の地位を明かにすることを目的とするもの。

しんじ 人事局 (名) 陸軍省又は海軍省の一局。將校及び將校相當官、准士官の身上に關する事務を掌するもの。陸軍省官制、人事局。

しんじ 眞字金 (名) げんぶんきん (元文金) の異稱。添極印の文の字が眞字なるよりいふ。大日本貨幣史、元文金或ひは之を古文字金といひ、或ひは之を眞文字金といひ、又之を眞字金といふ。

しんじ 親子關係 (名) 親子の身分關係に係る訴訟事件。人事訴訟手續法、親子關係事件。

しんじ 人字草 (名) 植、虎耳草、科、虎耳草屬の多年生草本。葉は根生、心臟形、形深き數多の缺刻を有し、淡綠色にして毛茸を有す。花莖は葉間より抽出し、夏季、白色の小花を穗狀花序に排列せり。我が國、各地の山間に自生す。

しんじ 神寺稅 (名) 古へ、神田及び寺田より神佛事に納むる稅。

しんじ 人事訴訟 (名) (注) 人の身分に關する訴訟。

しんじ 神祀棚 (名) 床の間、書院などの脇に設くる棚の一種。この内に

神を祀るもの。しんじ 眞實 しんじつ (眞實) に同じ。勢語、いとくしもあらじと思ふに、しんじちにて入りにければ、宇津保王、只今は、まだいとをさなく侍れば、奉らんとも思ふ給へぬ物、しんじちにあるやうにも給ひけるかな。源、いはいはけなく年足らぬほどにはおはすと、しんじちの親のやんごとなく思ひ掟て給へらん。

しんじ 人事長 (名) 鎮守府司令長官の幕僚の一人。鎮守府司令長官の命を受け、其の應下職員の人事に關する事務に服するもの。鎮守府條例、人事長。

しんじ 新室 (名) 新築のへや。あたらしきへや。或は、舊多の新室、附披畫開田。新に築りたる室。はなよめ。新室。

しんじ 秦室 (名) 支那の秦の王室。保元平治之亂、秦七世の風に歸りき。

しんじ 寢室 (名) 寝るへや。

しんじ 心疾 (名) 精神に異常を來させる病。心のやまひ。神經病。左傳、子重病之、遂遇心疾而卒。同、心疾、明淫心疾。

しんじ 心室 (名) 心臟内腔の下半部。左右の兩心室より成り、互ひに中隔によりて隔てられ、心耳とは各瓣を以て相通す。右心室より肺動脈を出だし、左心室より大動脈を出す。

しんじ 親暱 親昵 親しみむつむじつ。親近。古傳、親暱不可棄也。同、親暱、其死亡者皆親暱也。

しんじ 眞實 しんじち。保元平治之亂、眞實の御心向けは、極めてうはし

くおはしまして、柴葉馬眞實の御身を納められ給へる此の山には、勝經、所曾眞實者、應當供養。

しんじ 信實 まめやかなること。いつはりかさりのなきこと。りちぎ。忠實。

しんじ 迅疾 はやくこと。ときこと。迅速。

しんじ 人日 (名) 五節句の一。陰曆正月七日の稱。下文の東方朔の占書に、七日を人に配當せるに基く。東方朔書、歲正月一日占、二日占狗、三日占羊、四日占猪、五日占牛、六日占馬、七日占人、八日占穀。

しんじ 晝日 朝より晩まで。ひねもす。終日。朗詠、晝日雲心不驚。漢書、今足下晝日止政、士死傷者必多。日月の末日。又、年の末日。晦日。又、大晦日。

しんじ 眞實體 (名) じつたつ (實體) に同じ。

しんじ 眞實手形 (名) 眞實手形 (英 Bond due bill) の意。眞實手形に對して、賣買其他債權・債務の、實際に發生又は存在する場合に作成する手形の稱。

しんじ 眞字二分金 (名) しんじぶぶんきん (眞字二分判金) の略。

しんじ 眞字二分判金 (名) しんじぶぶんきん (眞字二分判金) の略。

しんじ 眞字二分判金 (名) しんじぶぶんきん (眞字二分判金) の略。

しんじ 眞字二分判金 (名) しんじぶぶんきん (眞字二分判金) の略。

の形に細りたる油。

しんじ 人事法 (名) 〔法〕人の身分に關する法規。

しんじ 眞字 (名) 〔英〕Ginger Beer の譯り。生薑を原料として醸せる清涼劑。しんじんびあ。

しんじ 神事奉行 (名) 毎年の放生會に、八幡宮の神事を奉行せし職。

しんじ 神習教 (名) 神道の一派。加茂規清の創設せるもの。

しんじ 新紙幣 (名) 新しき紙幣。新札。

しんじ 審事補 (名) 明治十五年五月一日に置き、初め陸軍裁判所後、陸軍の軍法會議所の職員として、審事の事務を見習はしめたる判任官。同十九年二月十七日廢せられたり。明治十六年八月太政官布告第二十四號、陸軍治罪法、軍法會議には中華審事審事補録事を置く。

しんじ 眞綿 (名) うはへはしまりなきやうに見えて、心底にしめくりにあること。

しんじ 辰砂 (名) 〔化〕しんさ (辰砂) に同じ。

しんじ 親炙 親しく接して薰陶せらるること。孟子、況於親炙之者乎。

しんじ 信者 (名) 其の宗教を信仰する人。信者。梁書、其時信者仁心深き人。仁者 (名) 仁徳ある人。謂之仁、智者見之謂之智。論語、三仁者安仁、知者利仁、同、焉知者樂水、仁者樂山、知者動、仁者靜、知者樂、仁者壽。〔註〕仁者で敵なし。仁者には何人も敵すること能はず。孟子、無敵。

しんじ 入車 (名) しんじりきし (人力車) に同じ。日入車鐵道の車輛。

しんじ 神社 (名) 神祇を鎮祭し、社殿を建てて、公衆の參拜の用に供する所。神の鎮座せる建物。かみのやしる。ほこら。みや。

しんじ 鐵匠 (名) はりを製造する職人。

しんじ 心匠 (名) 心中に立てたる工事の見積り。心中の工夫。つもり。たくみ。かんがへ。白居易文、想入心匠、寫從筆精。

しんじ 身上 (名) 一身にかかはること。みのうへ。身代。資產。家産。從經出世渡邊、はて且那の身上で、一年に千兩二千兩は筒おでも有る。味栗毛、あにがはあしあきり、箱もものう仕入れたと思はっしやい。

しんじ 神牀 (名) 神を安置する所。諸神、神牀を清めて、正直を授け給へり。

しんじ 神漿 (名) 神に供ぶる飲料。日不思議に湧出して、靈驗ある飲料。

しんじ 紳商 (名) 上流の地位にある商人。紳士の稱ある商人。

しんじ 紳章 (名) 臺灣住民にて學識・資望を有する者に授與する記章。圓形、徑一寸五分、地質厚き赤羅紗、兩側に銀線にて菊模樣を置き、中央に金線にて紳章の二字を綴り出す。臺灣紳章條規、紳章。

しんじ 信賞 賞すべき功勞ある者は必ず之を賞すること。後漢書、彭寵、寵、轉爲漁陽太守、後到、示信賞、利。寵、渠帥、盜賊、銷散。

しんじ 信賞 (名) 賞すべき功勞ある者は必ず之を賞すること。後漢書、彭寵、寵、轉爲漁陽太守、後到、示信賞、利。寵、渠帥、盜賊、銷散。

しんじ 眞實 眞實の御心向けは、極めてうはし

しんじ 眞實 眞實の御心向けは、極めてうはし

しんじ 眞實 眞實の御心向けは、極めてうはし

しんじ 眞實 眞實の御心向けは、極めてうはし

身體上又は精神上の勤勞を目的とする義務。例へば、兵役義務の類。

しんしやうじん 一新將軍 (名) 新任に就きたる將軍。高山記述に、新將軍義村公、近江國へ御勅座あり

しんじやうけいさう 一尋常警察 (名) 尋常なるさま、異風ならず品格あるさまにいふ語。保元朝、大男のおそろしげなるが、さすがに尋常げなり

しんじやうけいさう 一尋常警察 (名) 【法】保安警察の一。平常の事情の下に於ける警察。

しんじやうさい 一新嘗祭 (名) にひなめまつり(新嘗祭)に同じ。

しんじやうさい 一神嘗祭 (名) かむなめまつり(神嘗祭)に同じ。

しんじやうじ 一新掌侍 (名) 明治二年十月十二日に定められたる最下級の掌侍の稱。

しんじやうしはんがくから 一尋常師範學校 (名) 明治三十年十月以前に於ける師範學校の稱。師範教育令(尋常師範學校)

しんじやうせうがくから 一尋常小學校 (名) 小學校の一。學齡兒童に普通教育を施す所。現時は其の修業年限を六箇年と定め、其の主要の教科目を修身・國語・算術・日本歴史・地理・理科・圖書・唱歌・體操とし、女兒のためには裁縫を加へ、又土地の情況によりて手工を加ふことを得。小學校令(尋常小學校)

しんじやうたい 一進上臺 (名) 進上物を載せたる臺。堀川波鼓、口上演べて、進上臺を差し出せば

しんじやうちゆうがくから 一尋常中學校 (名) 明治三十二年四月以前に於ける中學校の稱。中學校令(尋常中學校)と改稱す他の法令中尋常中學校とは本令施行の日より當然中學校と看做す

しんじやうてつどう 一尋常鐵道 (名) 我が國にて三尺六寸、世界一般にては四呎八寸半の軌幅を有する鐵道。

しんじやうにようい 一新成如來 (名) 佛語。本地より垂跡・化現せる如來。垂跡の佛。

しんじやうはこ 一進上箱 (名) 進上物を入れる箱。若風俗は是れを二階の各棟へと、しんじやうはこ(つわたして)

しんじやうひんけい 一針狀披針形 (名) 【植】植物學上の用語。針形を帯びたる披針形。

しんじやうもち 一身上持 (名) 身上を持てること。又その人。しよたいもち。

しんじやうもの 一進上物 (名) 進上する品物。進物。贈品。狂言且何方へ進上物になさるとあつても中目近う遣はさるるに依つて

しんじやうゆわう 一針狀硫黃 (名) 【化】針狀に結晶せる硫黃の一態。焙煉せる硫黃の凝固し始めたるとき、殘部の液を流出せしむれば、此の結晶を得べし。

しんじやうれんがふ 一身上聯合 (名) 【法】國家の結合の一。二箇以上の國家が同時に同一の君主を戴き、其の領土は各自相異なりて、各獨立の統治關係を有するもの。

しんじやうれんがふ 一身上聯合 (名) 色の光澤あり。略すきとほりて瑤瑤の如く、形色種種あり。形正しく圓く青みあるを上品とす。裝飾に供し、又薬用とす。朗詠「可憐九月初三夜、露似眞珠月似弓」榮華本「金銀・珊瑚・眞珠等」賈島詩「百八眞珠貫赤繩」宋史外傳「注筆國以泥金表進眞珠衫帽、及眞珠一百五兩」

しんじゆ 一心受 (名) 心中に領會すること。ゑとく。がてん。なつと。得心。參同契注「口傳心受、難以盡形、之于毫楮也」

しんじゆ 一親受 (名) 手づからうくること。禮記「親受。受之於父母也」諸葛亮文「臣亮親受勅戒」

しんじゆ 一親授 (名) 手づからさづけわたすこと。禮記「親授。男女中、不親授」

しんじゆ 一神授 (名) 神より授かりたること。神のさづけ。王僧孺文「孝親陸友、非天墮地出。異才絕學、如有鬼神授。非參詩「英雄若神授、大材濟時危」

しんじゆ 一新鑄 (名) しんちゆう(新鑄)に同じ。

しんじゆ 一森堅 (名) 毛髮などのさか立つこと。唐書「我毛髮爲森堅」

しんじゆ 一人主 (名) きみ。人君。戰國策「語曰、人主賞所愛、而罰所惡」史記「魯君非有求入主」

しんじゆ 一人種 (名) 地球上に於ける人類の種類。骨格・膚色・言語などによりて黃人種・白人種・黑人種、又は亞細亞人種・歐羅巴人種・亞弗利加人種・亞米利加人種・馬來人種等に分かつ。人類のたね。ひとたね。法苑珠林「無量盡衆生時、有一人合眼、閻浮提內男女、唯餘一萬、留爲當來人種」

しんじゆ 一人壽 (名) 人の壽命。にんじゆ。

しんじゆ 一仁壽 (名) 仁徳ありて長命なること。論語「知者樂仁者壽」漢書

しんじゆ 一眞宗 (名) 佛語。いつかうしゆ(一向宗)に同じ。

しんじゆ 一新衆 (名) 新衆。甲陽軍鑑「御中間、御小人、或ひは新衆なんどの給分なる」

しんじゆ 一臣從 (名) 臣下となりて從屬すること。又、其人。しんじゆ

しんじゆ 一人衆 (名) 人の數。ひとかず。にんず。史記「魯何人衆、不龍當漢之一郡」同主は豈人衆不足、兵革不備哉

しんじゆ 一眞珠貝 (名) 【動】あこやがひ(阿古貝)の異名。しんじゆ

しんじゆ 一新宿 (名) 新に設けたる宿場。東鑑「八月八日、是日者、難波・沙汰置之新宿加増の間、重及此儀云云」

しんじゆ 一辰宿 (名) ほしのやどり。星宿。晉書「辰宿有辰宿不麗乎天、天爲無用」

しんじゆ 一衫宿 (名) しん(衫)に同じ。

しんじゆ 一心宿 (名) しん(心)に同じ。

しんじゆ 一參宿 (名) 二十八宿のしん(參)に同じ。

しんじゆ 一信宿 (名) 二夜宿すること。ふたばんどまり。ふたよんどまり。詩經「公歸不復、於女信宿」南史「伯玉不得已停都信宿、繼受數言而退」

しんじゆ 一伸縮 (名) のぶること。ちぢむこと。又のはすこと。ちぢむること。蘇軾詩「機牙在伸縮、溘落隨高低」

しんじゆ 一振肅 (名) ふるひつつしむ

しんじゆ 一眞宗 (名) 佛語。いつかうしゆ(一向宗)に同じ。

しんじゆ 一新衆 (名) 新衆。甲陽軍鑑「御中間、御小人、或ひは新衆なんどの給分なる」

しんじゆ 一臣從 (名) 臣下となりて從屬すること。又、其人。しんじゆ

しんじゆ 一人衆 (名) 人の數。ひとかず。にんず。史記「魯何人衆、不龍當漢之一郡」同主は豈人衆不足、兵革不備哉

しんじゆ 一眞珠貝 (名) 【動】あこやがひ(阿古貝)の異名。しんじゆ

しんじゆ 一新宿 (名) 新に設けたる宿場。東鑑「八月八日、是日者、難波・沙汰置之新宿加増の間、重及此儀云云」

しんじゆ 一辰宿 (名) ほしのやどり。星宿。晉書「辰宿有辰宿不麗乎天、天爲無用」

しんじゆ 一衫宿 (名) しん(衫)に同じ。

しんじゆ 一心宿 (名) しん(心)に同じ。

しんじゆ 一參宿 (名) 二十八宿のしん(參)に同じ。

しんじゆ 一信宿 (名) 二夜宿すること。ふたばんどまり。ふたよんどまり。詩經「公歸不復、於女信宿」南史「伯玉不得已停都信宿、繼受數言而退」

しんじゆ 一伸縮 (名) のぶること。ちぢむこと。又のはすこと。ちぢむること。蘇軾詩「機牙在伸縮、溘落隨高低」

しんじゆ 一振肅 (名) ふるひつつしむ

しんじゆ 一眞宗 (名) 佛語。いつかうしゆ(一向宗)に同じ。

しんじゆ 一新衆 (名) 新衆。甲陽軍鑑「御中間、御小人、或ひは新衆なんどの給分なる」

しんじゆ 一臣從 (名) 臣下となりて從屬すること。又、其人。しんじゆ

しんじゆ 一人衆 (名) 人の數。ひとかず。にんず。史記「魯何人衆、不龍當漢之一郡」同主は豈人衆不足、兵革不備哉

しんじゆ 一眞珠貝 (名) 【動】あこやがひ(阿古貝)の異名。しんじゆ

しんじゆ 一新宿 (名) 新に設けたる宿場。東鑑「八月八日、是日者、難波・沙汰置之新宿加増の間、重及此儀云云」

しんじゆ 一辰宿 (名) ほしのやどり。星宿。晉書「辰宿有辰宿不麗乎天、天爲無用」

しんじゆ 一衫宿 (名) しん(衫)に同じ。

しんじゆ 一心宿 (名) しん(心)に同じ。

しんじゆ 一眞宗 (名) 佛語。いつかうしゆ(一向宗)に同じ。

しんじゆ 一新衆 (名) 新衆。甲陽軍鑑「御中間、御小人、或ひは新衆なんどの給分なる」

しんじゆ 一臣從 (名) 臣下となりて從屬すること。又、其人。しんじゆ

しんじゆ 一人衆 (名) 人の數。ひとかず。にんず。史記「魯何人衆、不龍當漢之一郡」同主は豈人衆不足、兵革不備哉

しんじゆ 一眞珠貝 (名) 【動】あこやがひ(阿古貝)の異名。しんじゆ

しんじゆ 一新宿 (名) 新に設けたる宿場。東鑑「八月八日、是日者、難波・沙汰置之新宿加増の間、重及此儀云云」

しんじゆ 一辰宿 (名) ほしのやどり。星宿。晉書「辰宿有辰宿不麗乎天、天爲無用」

しんじゆ 一衫宿 (名) しん(衫)に同じ。

しんじゆ 一心宿 (名) しん(心)に同じ。

しんじゆ 一參宿 (名) 二十八宿のしん(參)に同じ。

しんじゆ 一信宿 (名) 二夜宿すること。ふたばんどまり。ふたよんどまり。詩經「公歸不復、於女信宿」南史「伯玉不得已停都信宿、繼受數言而退」

しんじゆ 一伸縮 (名) のぶること。ちぢむこと。又のはすこと。ちぢむのこと。蘇軾詩「機牙在伸縮、溘落隨高低」

しんじゆ 一振肅 (名) ふるひつつしむ

しんじゆ 一眞宗 (名) 佛語。いつかうしゆ(一向宗)に同じ。

しんじゆ 一新衆 (名) 新衆。甲陽軍鑑「御中間、御小人、或ひは新衆なんどの給分なる」

しんじゆ 一臣從 (名) 臣下となりて從屬すること。又、其人。しんじゆ

しんじゆ 一人衆 (名) 人の數。ひとかず。にんず。史記「魯何人衆、不龍當漢之一郡」同主は豈人衆不足、兵革不備哉

しんじゆ 一眞珠貝 (名) 【動】あこやがひ(阿古貝)の異名。しんじゆ

しんじゆ 一新宿 (名) 新に設けたる宿場。東鑑「八月八日、是日者、難波・沙汰置之新宿加増の間、重及此儀云云」

しんじゆ 一辰宿 (名) ほしのやどり。星宿。晉書「辰宿有辰宿不麗乎天、天爲無用」

しんじゆ 一衫宿 (名) しん(衫)に同じ。

しんじゆ 一心宿 (名) しん(心)に同じ。

しんじゆ 一參宿 (名) 二十八宿のしん(參)に同じ。

しんじゆ 一信宿 (名) 二夜宿すること。ふたばんどまり。ふたよんどまり。詩經「公歸不復、於女信宿」南史「伯玉不得已停都信宿、繼受數言而退」

しんじゆ 一伸縮 (名) のぶること。ちぢむこと。又のはすこと。ちぢむのこと。蘇軾詩「機牙在伸縮、溘落隨高低」

しんじゆ 一振肅 (名) ふるひつつしむ

しんじゆ 一眞宗 (名) 佛語。いつかうしゆ(一向宗)に同じ。

しんじゆ 一新衆 (名) 新衆。甲陽軍鑑「御中間、御小人、或ひは新衆なんどの給分なる」

しんじゆ 一臣從 (名) 臣下となりて從屬すること。又、其人。しんじゆ

しんじゆ 一人衆 (名) 人の數。ひとかず。にんず。史記「魯何人衆、不龍當漢之一郡」同主は豈人衆不足、兵革不備哉















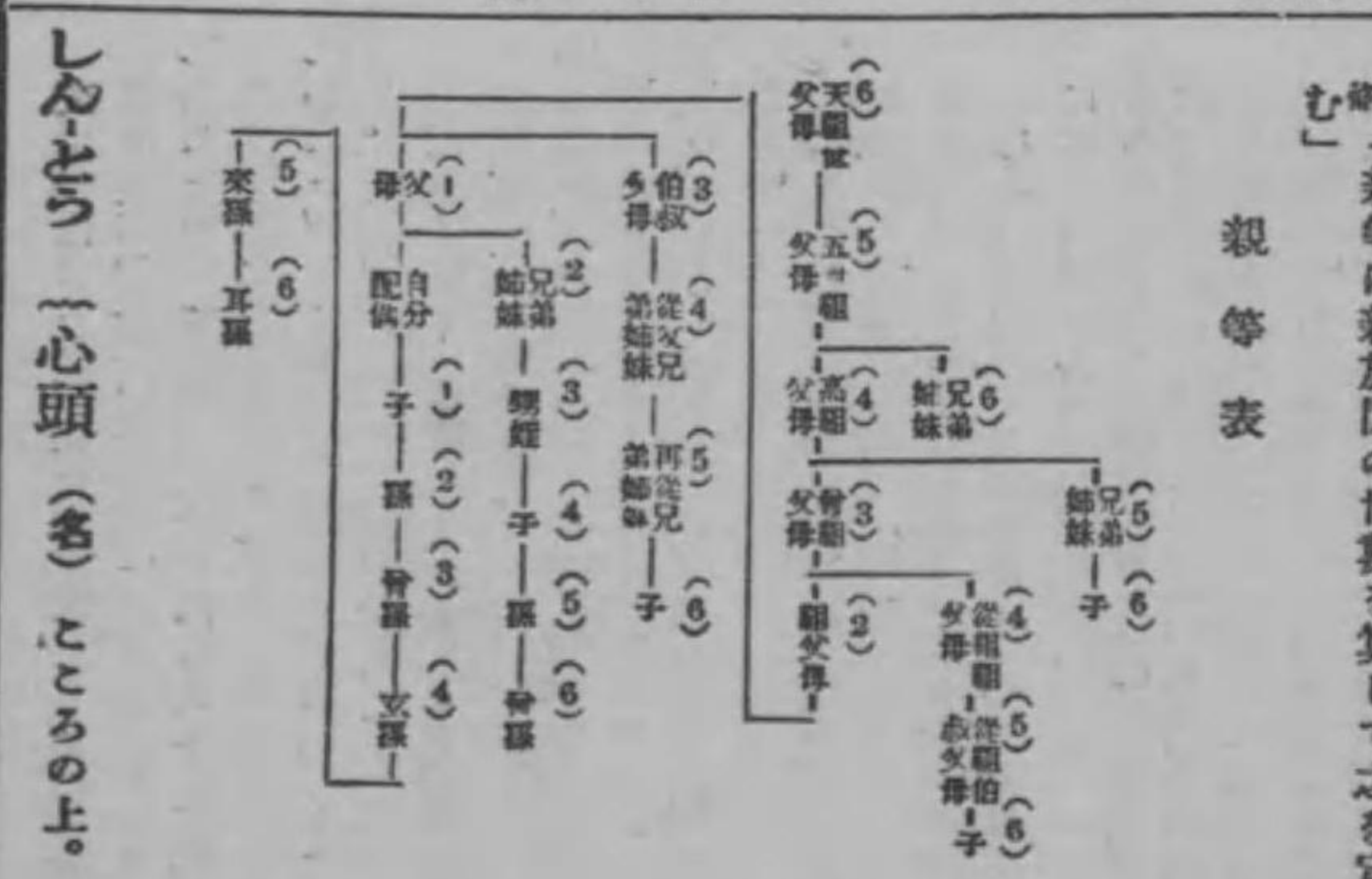
(名) 江戸時代、新田開發のとき、其の地代として納めしめたる金。



しんたごころ 念頭、心中。李山詩「更無塵事心頭起、還有詩情象外來」

しんたごころ 念頭、心中。李山詩「更無塵事心頭起、還有詩情象外來」

しんたごころ 念頭、心中。李山詩「更無塵事心頭起、還有詩情象外來」



しんたごころ 念頭、心中。李山詩「更無塵事心頭起、還有詩情象外來」

しんたごころ 念頭、心中。李山詩「更無塵事心頭起、還有詩情象外來」

しんと 一信天翁 (名) 「動」あはうどり(阿房鳥)に同じ。丹鉛總錄「信天翁漢中有之。食魚而不能捕魚。俟鷹所得偶墜者食之」

しんと 一神都 (名) 大御神のいます都。即ち、伊勢國宇治山田市の稱。

しんと 一神怒 (名) 神に怒りて。神怒の神に怒りて。神怒の神に怒りて。

しんと 一神奴 (名) 神に隷屬する。神奴の神に隷屬する。神奴の神に隷屬する。

しんと 一神度 (名) 進行の程度。神度の進行の程度。神度の進行の程度。

しんと 一神度 (名) 進行の程度。神度の進行の程度。神度の進行の程度。

しんと 一神度 (名) 進行の程度。神度の進行の程度。神度の進行の程度。

しんと 一神度 (名) 進行の程度。神度の進行の程度。神度の進行の程度。

しんと 一神度 (名) 進行の程度。神度の進行の程度。神度の進行の程度。

しんと 一神度 (名) 進行の程度。神度の進行の程度。神度の進行の程度。

しんと 一神度 (名) 進行の程度。神度の進行の程度。神度の進行の程度。

しんと 一神度 (名) 進行の程度。神度の進行の程度。神度の進行の程度。

しんと 一神度 (名) 進行の程度。神度の進行の程度。神度の進行の程度。

しんと 一神度 (名) 進行の程度。神度の進行の程度。神度の進行の程度。

しんと 一神度 (名) 進行の程度。神度の進行の程度。神度の進行の程度。

しんと 一神度 (名) 進行の程度。神度の進行の程度。神度の進行の程度。

しんと 一神度 (名) 進行の程度。神度の進行の程度。神度の進行の程度。







しんま

しんまい 神米 (名) 神に供ふる精米。くましね。あらひよね。かしよね。洗米。



(かまん)

しんまう 榎莽 (名) しんばう(榎莽)に同じ。  
しんまか 新味 雅樂の高脚壺。越調の一。和名高脚樂曲。新味(新味)著聞。馬樂・朗詠などはてて、散手・新味・其の駒などに及びける。龍鳴抄(新味)。

しんま 慎莫 (名) 慎しめてなすこと。莫かれの義。一説、尻巻く義にて、尻舞の稱。物ごとを慎ならざるやうに取りをさむること。己れが身の位置をなすこと。身じんまくをなすこと。しんまくにをへぬ。あともさきへもゆきがたし。進退難れ谷まも。又、始末がつげにくし。手にをへぬ。浮世風呂場しばらく取り組んでみたが、身が重くて、しんまくにをへんだを、漸足を引き倒して、どさりと轉んだ所を。

じんまくわ 蕁麻科 (名) 「植」いらくさくわ(蕁麻科)の異名。  
しんま 新町紡績所 (名) 明治十九年四月十六日農商務省工務局の管理の下に、群馬縣野原郡新町に設けたる紡績所。同二十年六月四日東京府民三越某に沽却したるにより、廢せられたり。

しんま 新前 (名) しんさん(新參)に同じ。  
しんみ 親身 (名) 極めて近しき親族。信實。深切。篤實。

しんみ

しんみ 眞味 (名) まことのあぢはひ。眞實の意味。蘇軾詩「酒中眞味老更濃」。

しんみ 新味 (名) あらたなる味。新規の飲食。後漢書「凡供遊新味多非其節」拾遺記「太子人得新味則含懷而歸」。

しんみ 浸淫瘡 (名) 瘡の一種。初め甚だ小さくして痒く、後痛みて瘡となり、液出でて肌を浸し、全身に蔓延するもの。和名「浸淫瘡」。

しんみ 新道 (名) 新開の道路。しんだう。町家の間にある狭きみち。こうち。東京の方言。浮世床「行つて来よう。また新道か」。

しんみ 親密 (名) したしくちかきこと。交情の深きこと。左傳「屯固比入。社比親密」。以得入。三國志「五張温言中庶子官最親密」。

じんみ

じんみ 眞面目 (名) 眞實な態度。盛衰記「眞面目平家世を取るに依つて、暫く身を縮がんとて、一旦平家に相從ふ計りなり」。太平記「眞面目衆徒吾が山を思ふ故に、防ぎ難ふに身を輕んじ候べし」。

じんみ 眞面目 (名) 眞實な態度。盛衰記「眞面目平家世を取るに依つて、暫く身を縮がんとて、一旦平家に相從ふ計りなり」。太平記「眞面目衆徒吾が山を思ふ故に、防ぎ難ふに身を輕んじ候べし」。

じんみ 眞面目 (名) 眞實な態度。盛衰記「眞面目平家世を取るに依つて、暫く身を縮がんとて、一旦平家に相從ふ計りなり」。太平記「眞面目衆徒吾が山を思ふ故に、防ぎ難ふに身を輕んじ候べし」。

じんみ 眞面目 (名) 眞實な態度。盛衰記「眞面目平家世を取るに依つて、暫く身を縮がんとて、一旦平家に相從ふ計りなり」。太平記「眞面目衆徒吾が山を思ふ故に、防ぎ難ふに身を輕んじ候べし」。

じんみ 眞面目 (名) 眞實な態度。盛衰記「眞面目平家世を取るに依つて、暫く身を縮がんとて、一旦平家に相從ふ計りなり」。太平記「眞面目衆徒吾が山を思ふ故に、防ぎ難ふに身を輕んじ候べし」。

しんめ

しんめ 眞面目 (名) 眞實な態度。盛衰記「眞面目平家世を取るに依つて、暫く身を縮がんとて、一旦平家に相從ふ計りなり」。太平記「眞面目衆徒吾が山を思ふ故に、防ぎ難ふに身を輕んじ候べし」。

しんめ 眞面目 (名) 眞實な態度。盛衰記「眞面目平家世を取るに依つて、暫く身を縮がんとて、一旦平家に相從ふ計りなり」。太平記「眞面目衆徒吾が山を思ふ故に、防ぎ難ふに身を輕んじ候べし」。

しんめ 眞面目 (名) 眞實な態度。盛衰記「眞面目平家世を取るに依つて、暫く身を縮がんとて、一旦平家に相從ふ計りなり」。太平記「眞面目衆徒吾が山を思ふ故に、防ぎ難ふに身を輕んじ候べし」。

しんめ 眞面目 (名) 眞實な態度。盛衰記「眞面目平家世を取るに依つて、暫く身を縮がんとて、一旦平家に相從ふ計りなり」。太平記「眞面目衆徒吾が山を思ふ故に、防ぎ難ふに身を輕んじ候べし」。

しんめ 眞面目 (名) 眞實な態度。盛衰記「眞面目平家世を取るに依つて、暫く身を縮がんとて、一旦平家に相從ふ計りなり」。太平記「眞面目衆徒吾が山を思ふ故に、防ぎ難ふに身を輕んじ候べし」。

しんめ

しんめ 眞面目 (名) 眞實な態度。盛衰記「眞面目平家世を取るに依つて、暫く身を縮がんとて、一旦平家に相從ふ計りなり」。太平記「眞面目衆徒吾が山を思ふ故に、防ぎ難ふに身を輕んじ候べし」。

しんめ 眞面目 (名) 眞實な態度。盛衰記「眞面目平家世を取るに依つて、暫く身を縮がんとて、一旦平家に相從ふ計りなり」。太平記「眞面目衆徒吾が山を思ふ故に、防ぎ難ふに身を輕んじ候べし」。



(りくづいめんし)

しんめ 眞面目 (名) 眞實な態度。盛衰記「眞面目平家世を取るに依つて、暫く身を縮がんとて、一旦平家に相從ふ計りなり」。太平記「眞面目衆徒吾が山を思ふ故に、防ぎ難ふに身を輕んじ候べし」。

しんめ 眞面目 (名) 眞實な態度。盛衰記「眞面目平家世を取るに依つて、暫く身を縮がんとて、一旦平家に相從ふ計りなり」。太平記「眞面目衆徒吾が山を思ふ故に、防ぎ難ふに身を輕んじ候べし」。

しんも

しんも 眞面目 (名) 眞實な態度。盛衰記「眞面目平家世を取るに依つて、暫く身を縮がんとて、一旦平家に相從ふ計りなり」。太平記「眞面目衆徒吾が山を思ふ故に、防ぎ難ふに身を輕んじ候べし」。







親戚。東鑑四代三年差進親類。狀上書... 親類(名) 親類の關係を記したる文書。視聽草十八(五)...

しんれい 新令(名) 新に發布せられたる命令。新に制定せられたる法令。行政警察規則(三)...

しんれい 新例(名) 新らしき例。大藏禮部之精氣曰神陰之精氣...

しんわ 親王(名) 昔時、皇太子の外の皇族男子に宣賜せられたる稱號...

しんわ 親類永預(名) 江戸時代、心神喪失者などにて本刑に處することを待たざる犯罪人を、終身刑其の親族に下付して禁錮し置くこと。

しんわ 親類永預(名) 江戸時代、心神喪失者などにて本刑に處することを待たざる犯罪人を、終身刑其の親族に下付して禁錮し置くこと。

しんわ 親類永預(名) 江戸時代、心神喪失者などにて本刑に處することを待たざる犯罪人を、終身刑其の親族に下付して禁錮し置くこと。

しんを 親王(名) 昔時、皇太子の外の皇族男子に宣賜せられたる稱號...



(くらんぢはらわんし)

大正五年十月二十三日發行

大正五年十月二十日印刷

著作權所有

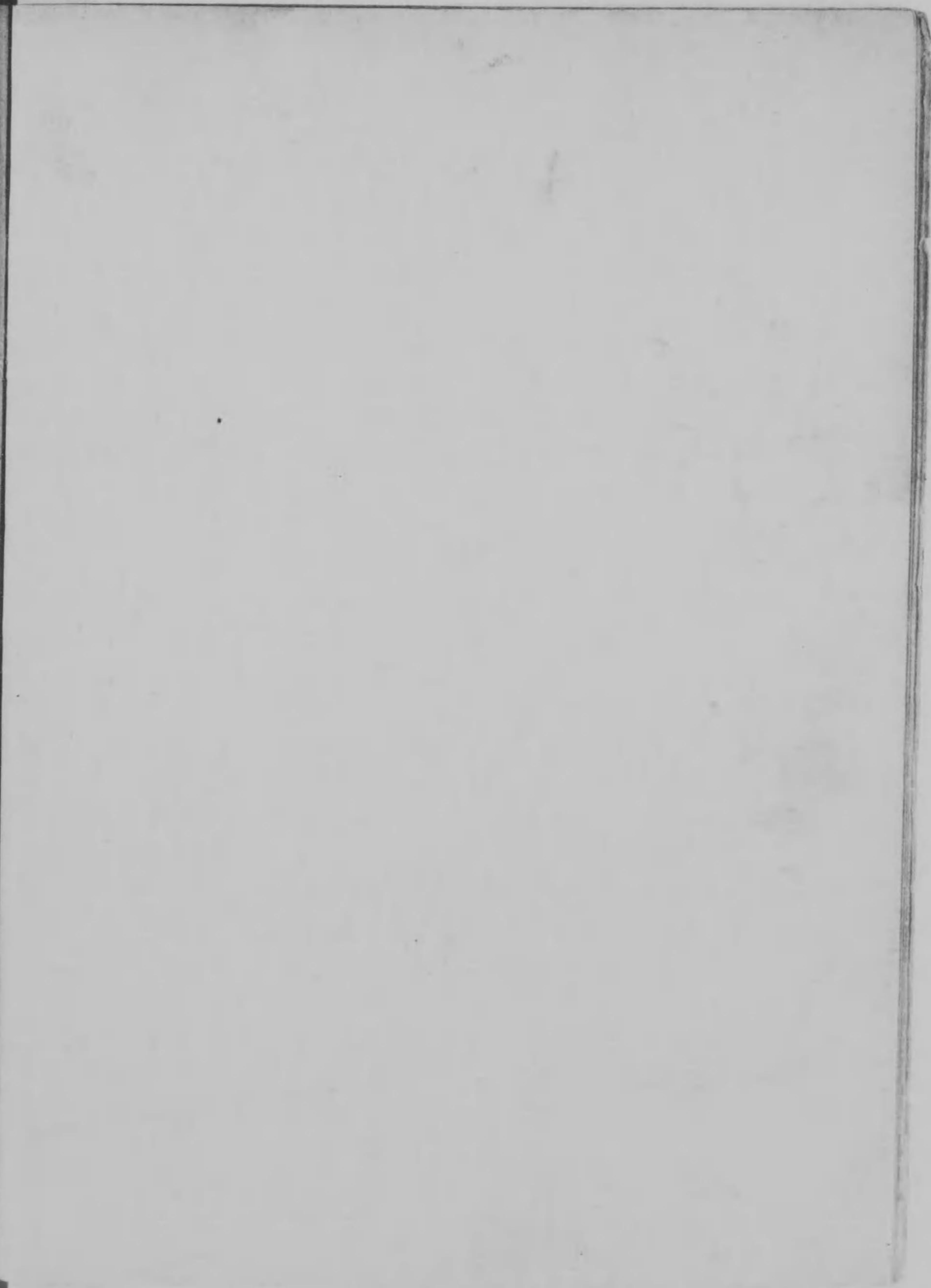
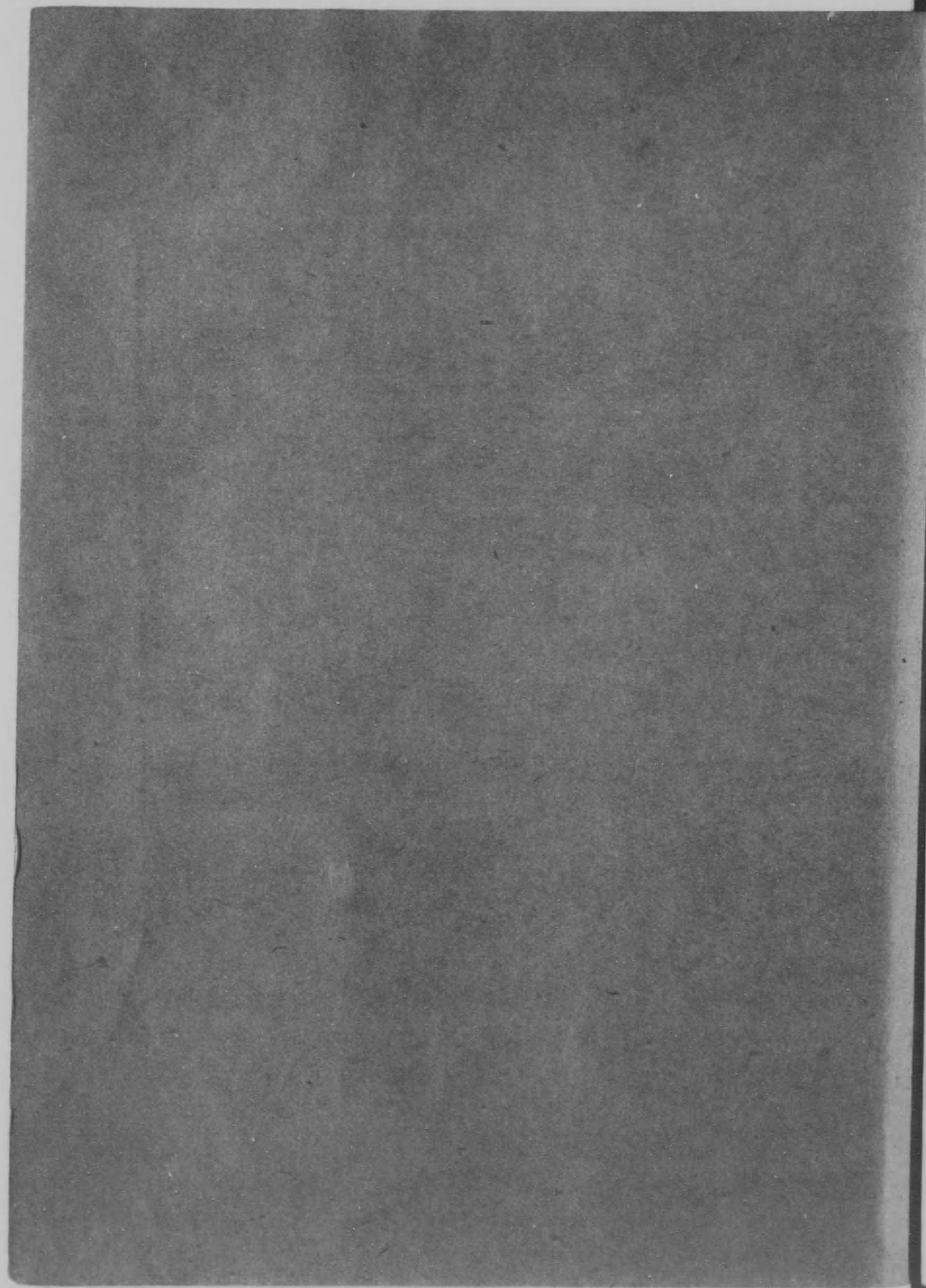
大日本國語辭典第二卷  
定價 金 七 圓

印 刷 所	代 表 者	發 行 者	代 表 者	發 行 者	著 作 者	著 作 者
株式會社 秀英舍第一工場	高 木 西 三	金港堂書籍株式會社	坂 本 嘉 治 馬	富 山 房	松 井 簡 治	上 口 萬 年

東京市神田區裏神保町九番地  
同 會社 富 山 房

東京市日本橋區本町三丁目十七番地  
同 會社 金港堂書籍株式會社社長

東京市込區市谷加賀町一丁目十二番地  
同 會社 高 木 西 三



終